

無政府主義図書館 (Japanese)

「権力のアナーキー」とは何か

S・G

S・G
「権力のアナーキー」とは何か
2018年4月28日

http://hapaxxxx.blogspot.com/2018/04/blog-post_28.html (2023年
4月16日検索)

ja.theanarchistlibrary.org

2018年4月28日

『身体の使用』の最終章でアガンベンは革命による「構成的権力」ではなく「脱構成的可能態」にこそ新たな政治があるとする。だがアナキズムの伝統（と20世紀の思想）はこれを定義しようとして成功しなかった、とアガンベンは書く。「権力はアナキーの包摂的排除をつうじて構成されるのであってみれば、真のアナキーは万人の目にはっきりとわかるようにあばき出して見せることと一致する。アナキーとは私たちが権力のアナキーを把捉し破棄するにいたるときにのみ思考可能になるものなのだ」。この「権力のアナキー」に魅せられたのがここでも幾度かとりあげてきた加速主義者であり、加速主義の意味はこの事態を徴候的に教えてくれるということ以外にはないだろう。ドゥルーズ＝ガタリにとってアナキーは「外部性の形式」としての戦争機械であり、「内部性の形式」である国家装置がその対極にあり、ある局面をへて国家は戦争機械を領有する（注）。「権力のアナキー」とはこの国家によって領有された戦争機械の効果のことである。戦争機械の破壊性と国家の原一暴力は厳密に区別されなければならない。国家による戦争機械の領有は戦争機械に極限的な暴力という特性を付加し、これが「権力のアナキー」を規定する。すべては戦争機械と国家の抗争であるならアガンベンとは逆にこういwanければならない。権力のアナキーはアナキーを把捉した時にのみ思考可能になるものだ、と。これは「破局」を「世界の死」をもってなきものとするのだと言い換えられるだろう。

（注）シベルタン＝ブランの『ドゥルーズ＝ガタリにおける政治と国家』は国家と戦争機械の錯綜した構図を精緻に描いた重要な著作だが、著者のマルクス主義がその破壊性を脆弱にしているように思われる。その端的なあらわれは「マイナリティ」を「プロレタリアの再解釈」としてしか評価できないことだ。この点ではラブジャードのマイナリティ論の方がはるかに破壊的である。